



GRIPS 文化政策ケース・シリーズ

国立新美術館の設立経緯について：保利耕輔先生インタビュー

1. 国立新美術館の概要

国立新美術館は、コレクションを持たず、国内最大級の展示スペース(14,000m²)を活かして多彩な展覧会を開催するとともに、展覧会カタログを中心とした美術に関する情報や資料の収集・公開・提供、子どもから大人までを対象とした教育普及活動を展開して、アートセンターとしての役割を果たすことを目的に、平成19年1月に東京都港区に開館した新たな国立の美術館である。

文化国家建設のため、国民が身近に文化に親しむ機会を拡充し、新たな美術の創造を支援するという大きなビジョンに基づき、芸術文化の育成や、国際的な芸術情報発信拠点としての役割が期待されている。また、従来、東京都美術館を使用してきた日展その他の公募団体に、新たな展示スペースを提供し、国際的な特別展を開催するなどの活動が可能になった。

建物は、地下1階・地上4階、敷地面積30,000m²、延床面積47,960m²を有する。館内には、アートライブラリーや研究室、講堂が設置され、ミュージアムショップ、カフェ、レストランなどの付帯施設も充実している。アートライブラリーには、美術・デザイン・建築等に関する書籍多数を所有するほか、企画展に併せた講演会やシンポジウム、ワークショップの開催、またインターンシップなどのプログラムも提供している。入館料は無料、展覧会の観覧には展覧会毎に観覧料が設定される。



国立新美術館の外観



国立新美術館とその周辺環境

2. インタビューの概要

新たな国立展示施設構想は、故金丸信氏の提唱により、建設可能性について実現可能性について既に調査研究が行われていたが、平成7年6月自社と連立政権の当面の重点施策の中に建設促進を提唱されたことが国立新美術館の実質的な建設へのスタートとなったとされている。その後、新施設の建設は、平成8年1月新政権に向けての政策合意にも盛り込まれた。

この際、自民党保利耕輔氏の調整により、自民党政務調査会長加藤紘一氏、連立与党さきがけ政策調査会長菅直人氏、社会党政策審議会議長関山信之氏の合意を得て、政権合意に達成することができたものである。

このような設立の経緯及び当初目的に関し、今後の文化政策に役立てる貴重な資料とすることを目的として、保利先生へのインタビューを記録した（実施日時は2008年6月19日 於 議員会館）。

- (1) 三党合意の経緯
- (2) 文化の位置づけ
- (3) 芸術文化振興への基本的な考え方
- (4) 国立新美術館に期待するもの

3. 保利先生インタビュー

保利：僕は子供の頃、絵を描いたり、工作をしたりするのが好きでした。「お前は絵ばかり描いて」といつも母親に言われていました。中学から高校、大学まで陸上競技の砲丸投げや円盤投げの選手をしていました。一九五八年、大学卒業後は、物を作る会社に入りたくてベアリングの大手メーカー、日本精工株式会社に入社し、主として営業畑を歩きました。私は技術屋ではありませんでしたが技術の勉強もし、精密機械部品を作る仕事に大変興味を持って取り組みました。特に高速、高荷重、高回転でまわるジェットエンジンのベアリング、昭和三十九年に開業した新幹線車軸用のベアリングの開発などに携わりました。

入社翌年、私はふとしたきっかけで女子美術大学を卒業した女性と結婚しました。彼女のお父さんは一水会所属のプロの絵描きで中野区の江古田にアトリエを構えていました。時々アトリエに遊びに行き絵描きさんのアトリエとはこんなものかと知ったのです。結婚当初は狭いアパートで二人の娘を育て生活に夢中でした。そんな中で私も妻も少しずつ絵を描いていました。芸術に興味を持つ素地があったと言えましょう。

一九七四年、社命でフランスの会社に派遣されることになりました。NSK フランス S.A.という現地法人で、社長として赴任しましたが、社員わずか十数名の小さな会社でした。それでも独立した法人でしたから自身の損益計算書やバランスシートを持っていて、日本の本社の支店とは性格を異にしていました。

私は絵も好きだったし、風景写真を撮ることも好きだったので妻と二人の娘を連れてよく田園地帯をドライブをして歩きました。家内は家で油絵を描き、ル・サロンと

いう公募展に出品し入選していました。展覧会の会場はコンコルド広場近くのグラン・パレでガラス張りの大きな建物でした。屋根の上には見事な彫刻が飾られている大きな美術館で家内の絵はそこに並べられていました。家内もさぞうれしかったことだと思います。

グラン・パレの正面、道路を挟んでプチ・パレがあって、企画展などがやられていました。ある時は有名な鑑真和尚の像が来ていてガラスのケースに入っていました。ほんの近くで見ることができ、芸術的な刺激を随分受けたものです。

そうこうするうちに一九七九年に衆議院議長をしていた父が亡くなり、葬儀のため私は一時帰国をしました。そして、地元佐賀県の皆さんに勧められて次の選挙に出るようにとの強い要請を受けました。私はフランスも好きだったし、ベアリングの仕事に興味もあったし、お断りしていましたが、地元の要請がますます強くなり、自民党本部からも勧められてお受けすることにしました。

結局、佐賀県全県区（定員五名）から立候補し幸いに当選することができました。当選してまず手がけた仕事は農業でした。そして約十年間、農業の分野に没頭しました。

ところが一九九〇年、当選五回になったばかりで海部改造内閣の文部大臣に任命されました。大臣として最初にやった仕事は芸術文化振興基金を補正予算に組んで通すことでした。政府が五百億円、民間から百億円を出すということでこの予算を通してもらいました。この種の予算を補正予算に入れられるのは財政法違反だと野党に迫り及されましたが、何とか切り抜けました。答弁では当時の遠山敦子文化庁次長や国分官房長の助けをかり、こうして芸術文化振興基金ができたのです。

文部大臣としては甲子園での始球式や国歌の学習指導要領での取扱いの明確化、文化勲章受章者や文化功労者の選定など難しい仕事をして退任しました。その後、暫くして加藤紘一政務調査会長のもとで政務調査会長代理という仕事をしました。当時は自・社・さきがけの三党による村山連立内閣のころで、政策の調整が難しく三党の政策責任者による政策調整会議が設けられ、連日のように政策の調整を行いました。各党三名ずつの政策の責任者が参加し私もその一員に指名されました。そこで改めて連立という形態では多数決原理が利かないということに気付きました。三党連立体制の中では各政党はあくまで一対一対一であり政党が大きいからと言って決してゴリ押しはできないということです。連立民主主義では多数決原理は働かないということでした。

村山連立政権が出来たとき三党の間で政策合意が出来ていました。連立政権が誕生したのは一九九四年六月でしたが、その後、日本は大きな問題に直面しました。まず異常な円高、一ドル七十九円まで進み日本経済、特に輸出産業は苦境に立たされまし

た。続いて翌一九九五年には阪神淡路の大震災に見舞われ、その対策に忙殺されました。また終戦五十年に際して戦争を反省する国会決議を行うという案件もありました。

当時の政策政調会議のメンバーは自民党が加藤紘一さん、参議院から宮澤弘さん、それに私、社会党からは関山さんなど、さきがけから菅直人さんなどで、連日協議を重ねたものです。やがて連立政権発足から一年がたち、政権発足時の政策合意がどの位、達成されたか検証してみようということになり調べてみると大部分は完了又は手がついていることがわかり、政権が二年目に入るのを機に新たな三党合意を作ろうということになりました。そして出来上がったものが【資料1】の新三党合意です。

その素案は円高対策や阪神淡路の大震災対策に関する経済対策が中心でした。会議に付議された原案を見て座長の加藤さんが「保利さん、これでいいんですか」と尋ねられました。既に議論を何度も重ねて作ったものですから勿論、異論はありませんでしたが、私は「ただですね」と言って折角村山内閣なんだから文化的色彩を入れてみてはと考へ「文化という文字が入ると味が良くなりますねえ」と発言しました。加藤さんは「それは面白いなあ」と言って出席者の了承をとって文化政策について短い文章を書き入れることが認められました。そこで書いたのが僅か三行の文化政策でした。その三行の中にかくし絵のように入れたのが新構想にもとづく博物館と公募展用の新美術館の建設でした。

- この新構想や公募展開催とか、そのあたりが先生のご発案ということですか？

そうです。原文は私が書き、当時文化庁長官をしておられた遠山敦子さんに手を入れてもらって加藤さんに提出しました。博物館の方は九州博物館として福岡県の大宰府に財界や議員の皆様にご手伝って頂いて完成しました。一方の公募展用美術館の発想の原点は三つあったのです。一番目はパリでの経験に基づくもので、あのグラン・パレのようなものが日本にも欲しいな、それに一水会とか二科会という全国規模の公募展は上野の都美術館で行われていました。しかしこれは東京都のもので、毎年日展などの大きな公募展が占めていて東京都民による美術家団体が入りこむ余地がありませんでした。そこで全国規模の公募展が開催できる国立の施設が必要だったのです。

二番目の理由は私が文部大臣をしていた時文化庁から「こんなものがあるんです」と言って一冊の資料を見せてもらったことです。その文章が・・・

-昭和53年の要望書でしょうか【資料2】。東山魁夷先生なども署名されているのですが。

いや、それもあつたんですが、その前のものであつたと思います。表紙には大きな文字で嘆願書と記され、横山大観、河合玉堂、安井曾太郎、梅原龍三郎といった錚錚たる作家が墨で署名したもので、それ自体が文化財になりそうなものでした。それには国立の公募展美術館を作りたいという内容が書かれていました。これだけの方々が希望しておられることはいつの日か実現しなくてはならないと考え続けていたことが二番目の理由です。

三番目の理由は東京都の女流美術家団体の朱葉会の関係者からの要請でした。彼女たちはいつの日か上野の美術館で自分たちの絵を展示したいと思っていて上野の美術館に申し入れしていたようです。ところが上野は全国規模の公募展、つまり日展や二科展、それに大きな企画展で年間スケジュールが一杯で小さな美術家団体が入り込む余地は全くなかったんです。都の美術家団体が都の美術館に展示できない、そこは全国展などに占められている。だから国立の公募展用の美術館を作ってもらい、全国規模のものはそちらでやるようにしてもらえば有難い、という事でした。つまり東京都美術館は東京都民に優先的に使わせて欲しいという願望が寄せられていたというのが三番目の理由なんです。

以上の三つの事、つまり、グラン・パレのような施設が欲しい、古い嘆願書のこと、東京都の美術家団体の願望などが常に頭の中にあっただけで政策調整会議で文化の条項を書くことを認められた時は「しめた！」と思ったんです。そこで思いを込めて「公募展示場の建設」という言葉を入れたんです。そうして出来上がった新三党合意は三党の政策責任者が署名したのですから政治的にも非常に重いもので二年目に入った村山内閣が実行すべき政策目標となったんです。

政策目標として掲げても実行されなければ絵に描いた餅になってしまう。そこで直ちに文部省に実現方を要請しました。ちょうどその頃、東京都の鈴木元知事が計画されていた東京都市博が青島知事の出現でとりやめになり晴海のあたりの土地があきました、東京都もそのあたりを文化ゾーンとして活用する気持ちがあり、その土地を一部買い上げてそこに美術館を作ろうという提案を文部省が持って来ました。案を持って来たのは当時官房長だった佐藤さんと言う・・・

- 佐藤禎一さんでしょうか？

そう、今は東京国立博物館の館長をしておられますが、提案は悪かろう筈はない、すぐ佐藤さんに頼んで当時の大蔵省と折衝に入ってもらったんです。とにかく用地代だけで三百億円位かかるので簡単にはいきません。やがて当時の大蔵省の林主計局次長がとんで来て、「難しいです」と言うのです。これは勘弁して欲しい。長期検討事項にして欲しい。と言うのです。

ここで引いてはだめだと思い少しジェスチャーを交えて大声で「長期検討というのはやらないに等しい、三党合意で決めたこの重さを否定するのかね」と話しました。そして「何があってもやって下さい、その場所がだめなら何か代案を文部省と一緒に考えて下さい」と強引にたたみかけました。次長は剣幕に押されたのでしょうか「文部省とよく相談してみます」と言って一旦引きとって行かれました。

それから数日たって「こんなことではいかがでしょうか」と言ってひとつの案を持って来ました。それが今、国立新美術館が出来たあの場所なんです。そこには東大の生産技術研究所が建っていたんですが、その建物は戦前は軍隊の建物で、二・二・六事

件の時そこから兵隊が出動したという由緒ある建物です。しかし、あまりにも古くなり私も二度ほど行ってみましたが随分汚れていました。明らかにもう建替えの時期に入っているものでした。

そして建替えるなら生産技術研究所は柏か駒場にあたりを持って行ったらいい、何も六本木においておく必要はないということで、六本木の建物は解体し、その場所に公募展美術館を新たに作ろうという構想を持って来てくれたんです。私は「やむを得ないな」と言いながらも本当に感謝していました。ここまでは独自専行と言われるかもしれませんが三党の合意という裏付けがあるので、まるまる勝手にやったというわけではありません。

それから先のことは文化庁にバトンタッチし平山郁夫先生が会長になられて、新しい公募美術館を作るための委員会が立ち上りました。設計はお亡くなりになった黒川紀章さんが担当されることになりました。今も思い出として残っていますが大蔵省には随分お世話になったので当時、大蔵大臣をしておられた宮澤喜一先生のところへ行き、これまでのいきさつを詳しくご報告し、併せて今後の特に予算面でのご助力をお願いしました。先生はよく耳を傾けて話を聞いてくださり「いいことをおやりになった」と褒めて頂いたので、大変うれしかったですね。まあ、そこまでは政治家には殆んど相談しないでやって来ましたが、君は悪いことをしたねえ、とかけしからんねえとか言った人は一人もいませんでした。

仕事は文化庁や設立委員会の方に移ったんですが、なにしろ大プロジェクトだったので毎年の予算獲得のために国会議員による応援団を作らなければならないと考えたんです。そのころ大きな計画として京都に和風迎賓館を作るという計画があり、野中先生などが中心になって金丸信先生を会長にして「和風迎賓館設立議員連盟」が作られ予算獲得のための活発な活動をしておられました。

そこで私は大蔵省に行って林次長さんに会い「予算獲得のために議員連盟を作ろうと思うがどう思いますか、議員の応援団が沢山いた方が予算がつけ易いと思うが」と相談しました。これは裏話になりますが意外なことに「それは勘弁して頂きたい」と言うのです。私は議連が出来ると、大蔵省もその対応で、かえって忙しくなるのかなと考え議連を作ることをやめようと思いました。しかし議連を作らないでうまく予算をつけてくれるかなあ、と思いましたから「議員連盟は作らないが、予算はしっかりつけてもらえるのか」と念押しをしました。そして口約束ではあるが予算をきちんとつけてもらう約束をとりつけました。その約束は歴代の主計局の担当に申し送りがされ予算は文化庁からの要求にもとづいて毎年確実につけられていきました。議員連盟を作らずにこれだけのものが出来た非常に珍しいケースです。こうして三党合意にもとづく公募展美術館が出来たのですが文化庁はもとより、当時の林次長さんをはじめとする大蔵省の皆さんのご理解と協力の賜物だと感謝しています。恐らく宮沢大臣が声をかけて下さっていたと思っています。

さて設計段階でひとつ厄介な問題が起りました。それは衆議院の文教委員会の一般

質問の中で反対論が出たことです。その要点は、六本木の東大生産技術研究所の建物は歴史的にも非常に由緒あるもので、戦前は軍隊の建物だった。そこから二・二・六事件の時に陸軍の兵隊が出陣したという歴史的・記念碑的な建築物でこれを取り壊すことはあいならんという意見でした。民主党の河村たかしさん、それに自民党の松浪健四郎さんなどの意見です。この問題は文教委員会で正式にとり上げられた意見ですから無視することはできない。文化庁が精力的に折衝し、私も中に入って、建物の一部を残すということで妥協がはかられ黒川紀章さんの設計に合わせる型で建物の一部が残されることになりました。それが、今、政策研究大学院大学側、六本木側の玄関の左にある三角の建物です。委員会の場で納得してもらおうための妥協の産物です。

もうひとつ気になったのは、新美術館の前にできた政策研究大学院大学との兼ね合いです。この大学院大学はもともと埼玉にあったんですが新しいキャンパスを鎌倉に作る計画があるということは知っていました。ところが国立新美術館の正面に作る計画がいつの間にか進行していました。私はそのことを事前には知りませんでした。敷地の全体像が頭にあった私の考えはその敷地を前庭にして、美術館に来たお客さんが、アフター・ミュージアムを楽しんでもらう何もない緑地にしたいと考えていたんです。折角、黒川さんと言う世界的な建築家が精魂こめて作られたモダンな美術館を生かすためにも緑地を設けて少し離れたところから建物を眺めていただくのが良いと思っていたんです。

ですから大学院大学を作る計画が進行しているのを知った時、思わず「けち！」とつぶやいてしまいました。もっとも、日本人の感覚から言うと六本木という高価な土地を有効に活用するというは当り前かもしれないのですが、建築物を芸術作品として眺めるためにはある程度の距離が必要だとの考え方には変りはありません。上野にある昔の皇室博物館、今の国立博物館付近の雰囲気は非常にいいですね。上野公園の池のあたりから遠景としての博物館を見、門を入れて左に表慶館を眺めながら博物館にたどりつく、何ともいえない良い雰囲気を感じます。まあ言ってみれば、無の効用、何もないということの価値のようなものを感じるのです。

それでも、文部省と大蔵省が手を握って決めた事だから、国立新美術館を作ってもらうためには仕方がないか、とあきらめました。

同じような意味で大学院大学に道路をはさんで隣接したところが米軍のヘリポートになっています。これも将来は返還を受けて緑地化したいと願っています。これには占領当時からのいろいろないきさつがあるらしいですね。

- 通常の政策実行とはかなり違うと思います。議員連盟ができていないとかですね、やはり三党で合意されましたよね。その時に保利先生からいろいろご説明をされた時に、他の社会党とかさきがけの菅先生や関山先生はどういう反応だったのでしょうか。最初から非常によいと賛成だったのでしょうか。

新三党合意の中で僕が提案したのは「文化」の二文字を入れることでした。座長の加藤さんに言われた通りたった三行で文化政策を入れたんです。ですから実際あまり目

立ちませんでした。政策調整会議の皆さんの頭の中は、円高対策や地震対策で頭が一杯だったと思います。だから文化政策の三行は「保利さんが言うことだから間違いないだろう」と信用してくれてこの条項には全く異論はなくて、そのまま了承されました。だから新三党合意に「文化」の二文字を入れる提案をしたこと、それを座長の加藤さんが認めてくれたこと、提案した三行が異論なく通ったことなど考えると非常に幸運だったと思います。落成式の時、加藤さん、菅さん、関山さんも呼んでもらいましたが関山さんは非常に喜んでいました。

- やはり先生のアイデアがよかったということでしょうか。

発想の三つの原点は前にお話しした通りなんですけれどもそれを胸の中に抱き続け、チャンスを見逃さず提案したことが良かったんでしょうかね。私の義父は絵描きでしたから世の中の絵描きさんのためになったのかなあ、また彫刻家、工芸家、書家のためになったのかなあ、とひとり喜んでいますが、でも僕がやったなんて言うつもりは全くありません。平山さんや黒川さんも随分苦労しておられたに違いありません。特に黒川さんは古い建物の一部を残せということに苦労しておられましたし、地下鉄の乃木坂の駅から雨に濡れずに入るにはどうすればいいかや、審査のために持ち込まれる膨大な量の作品の搬入路の配置、更には審査のための設備など、苦心しておられる話を伺いました。また私が日ごろ考えていた天井の高い圧迫感のない展示場もできました。更に空調施設や石井幹子さんが担当された照明などもきめ細かい配慮がなされていてゆったりとした落ち着いた展示場になったことを嬉しく思っています。

でも計画決定の決め手になったのは長期検討事項にして欲しいとの大蔵省の提案を「長期検討事項というのは政治用語で言えばやらないに等しいことだ」と言って強硬に突っぱねた、それが計画が進行した大きな要因のひとつではないでしょうか。「そうだなあ、三百億も捻り出すのは難しいだろうな、じゃあ諦めるか」と言っていたらこの美術館はできなかったと思います。

- もうひとつだけお聞きしたいのですが、今、確かに国立新美術館は大盛況で、うまくいっているようですが、他の美術館についてはですね、独立行政法人化ということで、財政的にいろいろなお金を外からとってくるようにしたり、より効果的な公的なお金の使い方などを言われて、非常に苦慮しているところがたくさんあるわけですがけれども、先生の原点でもある、アーティストを育てる、それによって世の中の生活の質が上がるとかですね、人々の暮らしにゆとりが生まれるとか、そういったような観点から見た時に、今何をどのようにするべきかという点について、先生のご意見を賜ればと思います。

そこは現実的な問題で、効率的な運営が求められるのは当然です。独立行政法人になって運営の自由度は上っている筈ですから知恵をしぼって魅力ある運営を心がけて欲しいと思います。ただ儲け主義に片寄った運営をすればいいというものではないと思います。そのために運営費についても国から助成をもらっていますから。儲け主義

だらけの運営では真の意味で芸術家は育たないし、他の大きな国では文化に対して大きな予算をつけているのが実情です。設備予算にしても運営予算にしても文化国家にふさわしい予算が必要だと思います。

この美術館をスタートさせる時は本当に、「えい、や」と作ることにしたのですが、その時、躊躇していたらこの美術館は出来なかったと思います。幸いこの美術館は地の利を得て盛況裡に運営されていて良かったと思います。それにしても私と同じ年の黒川さんが亡くなってとても残念です。ある時、美術家団体の会合でこの美術館を作ったいきさつを話した事がありました非常に理解を示していただきました。

- それはどちらの団体でしょうか？

二紀会の会合の時でした。二紀会の山本貞理事長はこの美術館の計画に非常に興味を持たれて、計画段階で私のところに話をききにおいでになりました。山本さんは私と同じ昭和九年生まれ、同年のよしみで詳しく話をしました。そしたら「それで分かりました」と言うので「何がですか」と尋ねると「こんな大きな話が役所単独でできるとは思いませんでした」と言われたのです。

- 何が背景にあったのかということがみんな知りたいということがあるようでして。

そうですね。かなり強引なことをしましたが、結果は良かったかも知れませんね。ただか三十年たらずの私の政治生活の中で印象に残る仕事のひとつです。人がどう言うかわかりませんがね。私はあまり宣伝めいたことを言うのが性に合わないのです。

- 今日お伺いしたあたりの話をテープ起こしさせて頂いて、少し整理をしまして、公表させて下さい。

どうぞよろしく申し上げます。まだお話したいことが沢山ありますが、そのゆとりがないので項目だけ申し上げます。新国立劇場、いわゆるオペラハウスを作った時の話です。初台のところに一万坪ほどの当時の通産省の土地の会社と共に都市再開発計画を作りオペラハウスの部分の空中権を売って、そのお金でオペラハウスを作った時の話です。これは遠山敦子元文部大臣の力が大きかったですね。

同じような手法で東京駅の原型への復元計画が進行中です。原型の設計者は辰野金吾という人で私の地元の佐賀県唐津市の出身です。だから原型に復元される日が一日も早いことを願っています。いろいろありますねえ。

- 本日は大変ありがとうございました。